ISSN 0918-1954

アルパック ニュースレター

大屋町（兵庫県）に“おおや農村公園”がオープンしました
（本文中に関連記事があります）

アルパック　ニュースレター　もくじ　1997年7月1日

●おおや農村公園がオープンしました …… 2
●加古川ふるさと自然のみち事業が完成しました …… 4
●京阪神北部丘陵に既存都市活用型の新首都を …… 7
●建築家が音楽会を催す …… 8
●「震災から復旧・復興へ」の発行 …… 9
●「ＮＰＯフォーラム'97 」ー市民社会の創造と
　ＮＰＯの役割ーに参加して ……10
●「農」のテーマパーク“ブルーメの丘” ……10
●呼吸するお寺“應典院（おうてんいん）” ……11
●巨大商業施設の出現でますます活気づく新宿 ……13
●㈱九州地域計画研究所（九州事務所）の新体制について ……14
●新刊旧刊書評紹介 ……15
●まちかど ……16

NO.84

星と語る森と清流のまちに おおや農村公園がオープンしました

原田　稔

おおや農村公園のある大屋町は兵庫県の南但馬に位置し、大阪、神戸から播但自動車道を京都からは国道９号線を利用して３時間あまりのところにある。

四方を山に囲まれた人口 5,000人弱の山間のまちで、農業を中心に古くは養蚕、近年では日本一の生産量を誇るスズの明延鉱山で栄えてきた。しかし、その鉱山も振るわなくなり一時は１万人を超えた人口も減少の一途をたどり昭和62年には、ついに鉱山も閉山となった。

明延では全盛期には生バンド付きのダンスパーティーが開かれたり映画が東京と同時に封切られるなど、華々しい時代があったらしい。

この農村公園は農林水産省の補助金を受け、大屋町が「都市と農村との交流」を目的に、休耕田となった棚田を利用して平成６年度から市民農園、ペンション、工房、コテージ等を整備してきたもので、我々もその構想から施設の設計監理まで関わり、かたちあるものに実現できた。

市民農園は全てオーナー制の水田で、50㎡程度のものを中心に80区画が整備され、先日300人を超える応募者の中から選ばれたオーナーの手によって、初めての田植えが行われた。

ここでは、機械や農薬を使わない昔ながらの有機農法が行われ、作業の指導や日頃の手入れは地元の農家の方が世話をされる。オーナーは最低、田植え、草取り、稲刈り等の時期に足を運ぶ。

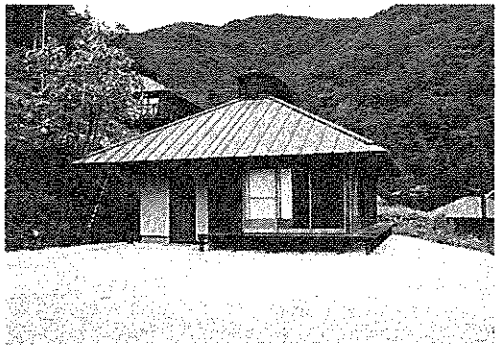
また、ペンションやコテージに泊まり、滞在型でゆっくりと農作業を楽しむこともでき、また工房では、農作業のあい間に地元の工芸や手作りソーセージ、そば打ち等の体験もできる。

ペンションはツインの洋室が12室で、暖炉の前で団らんの一時を過ごせるロビー兼居間、この地方で取れた食材を活かした料理が味わえるダイニング、浴室等が設けられている。

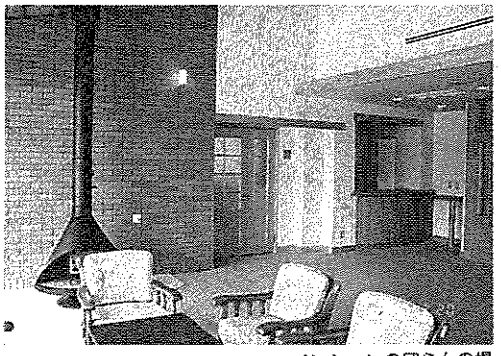
コテージは６棟で、それぞれに囲炉裏のある板間と８畳の畳の間、土間の台所、浴室等があり、屋外ではバーベキューも楽しめ家族や仲間同士で利用できる。

しかしここでの最大の魅力は、なんと言っても自然に囲まれたそのロケーションである。

四方を緑豊かな山に囲まれ清流大屋川がそ



田舎風のコテージ



ペンションの団らんの場
暖炉のあるロビー

棚田のオーナーによる田植え

ソーセージづくり　これはなかなか難しそう

の中心を流れるのどかな農村の風景、夜には満点の星を抱く夜空。

テラスの椅子に腰掛け、しばしあわただしい都会の生活を忘れる。記憶の底からなつかしい何かがよみがえる‥‥。

全体の施設計画については、美しい棚田の景観をできる限り壊さずにそれを活かし、風景と一体となった施設整備を行うかが大きな課題であった。

このためにそれぞれの建物は可能な限り現状の棚田の上に分散して計画し、造成が必要な部分については地形を活かした段上の造成を行った。

その結果ペンションはその段差を利用して一部２階建てとし、２階に玄関を始めロビーやダイニング、宿泊室６室を配置し、階段を下りた１階に残りの宿泊室６室と浴室を配置するプランとなった。

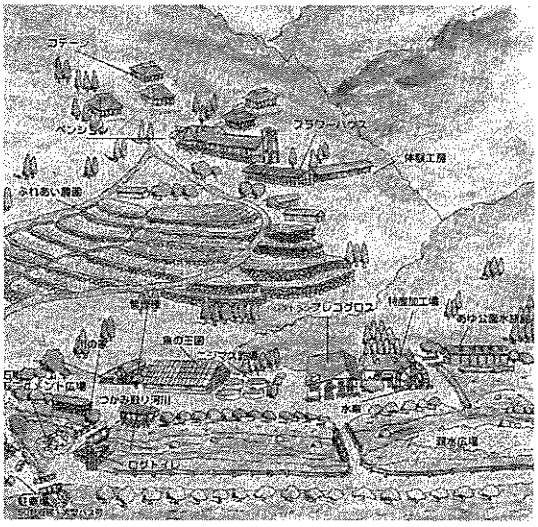
また、このことは２階に設けられたロビー、ダイニングの屋外テラスから、棚田や大屋町内を眼下に見おろす最高のロケーションを得ることにつながった。

コテージについては既存の棚田一枚一枚にそれぞれの棟を配置し、美しい棚田の石積みを出来るだけ残した。ここからも、建具を全開することにより、室内に居ながらにして森の緑や美しい田園風景を望むことができる。

目下、私はこのコテージで四季折々の大屋町の自然を肴に炉端で一杯やることのできる日を楽しみに、都会であわただしい生活を送っている。

（大阪事務所　はらだ　みのる）

市民農園のある棚田の風景



おおや農村公園マップ
出典：パンフレット

おおやふれあい市民農園農事通信　No.1

5月24日、25日、おおや農村公園内のふれあい市民農園において、田圃のオーナーによる田植えが行われました。中には親戚一同や子供会を引き連れて参加される方もあり、予想を上回る人で賑わいました。

田植えは全て手植えで行われ、1区画2、3時間の作業でしたが、生まれて初めて田圃に入る人も多く、足を取られて尻餅をつく人も少なくありませんでした。

都会ではお洒落な娘さん達も、田圃に入って1時間も経つと、すっかり堂に入った農家の娘になっておられ、この中から一人や二人農家の嫁が生まれるのではないかと、行く先楽しみな今日この頃です。

次回は、6月の末頃に田圃の草取りの予定です。

（原田通信員）

～地域の身近な自然を見直すきっかけとして～

加古川ふるさと自然のみち事業が完成しました

稲岡　宏

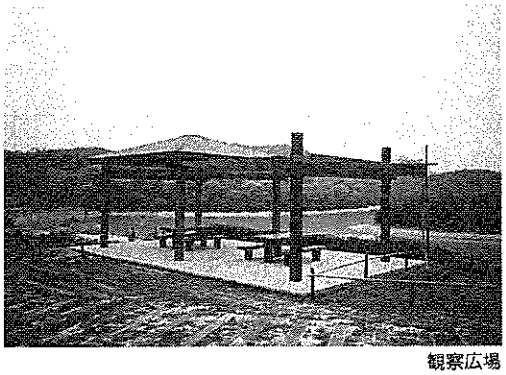
事業の概要と加古川市の特性

「環境保全のためには、国民一人ひとりが、感性を重視しつつ自然の中で自らの体験を通して自然の偉大さを感じ、自然のしくみの理解を深めていくことが大切」という主旨のもと、現在環境庁が「ふるさと自然のみち」整備事業を全国で進めています。

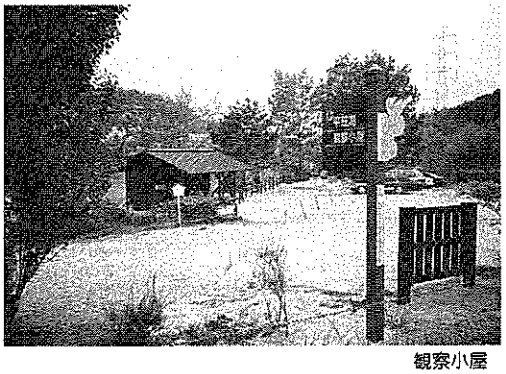
平成6年度より、このふるさと自然のみち事業を計画、実施した兵庫県加古川市は、播磨灘に面した自然が豊かに残るまちです。市中央を県下最大の河川である加古川が悠々と流れ、北部には播磨中部丘陵県立自然公園を中心とする山林や丘陵が広がり、播磨平野にはのどかな田園風景とともに、播磨地域に特有のため池や灌漑用水路が数多くみられます。

このような環境の特性を背景に、本事業は「加古川ふるさと自然のみち」として、清流加古川と豊かな自然に恵まれた播磨路を歩くことで、自然の資源や、地域の人々が築き上げてきた文化・歴史にふれあうことのできるウォーキングコースを整備しました。

コースは探索の目的により、のどかな田園風景と静かな山里を歩く「ピクニックの径（みち）」、文化財や遺跡など歴史資源を巡る「くさぶえ

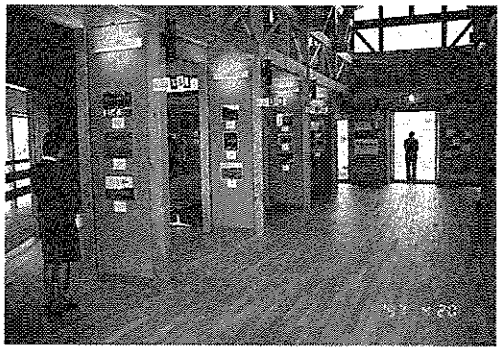


観察広場



観察小屋

ウォーキングセンター竣工式



ウォーキングセンター展示ホール

の径」、加古川をはじめとする大小様々な川や水辺の表情を楽しむ「そよ風の径」、加古川や平荘湖など四季折々の自然の中で野鳥などを観察できる「山びこの径」、城山を中心とした北部の丘陵地と権現池の周囲を歩く「大地の径」の５つのルートを設定し、距離も、4.2kmと気軽に歩けるものから、19.9kmと本格的なウォーキングトレイルを楽しめるものまでさまざまになっています。

コース上の要所には、道標をはじめ、自然・歴史・文化・風土などの解説標識、自然観察のやり方やネイチャーゲームを紹介したネイチャーサインを設置し、オリエンテーリング感覚でルートを廻れるようにしています。また、コース上の拠点として、自然観察や環境学習、ネイチャーゲームなどのアウトドアレクリエーションができる観察広場や観察小屋を設置し、歩く人の休憩の場としても利用できるようにしています。そして、平成８年４月には、５つのウォーキングコースを結ぶ拠点として、加古川市ウォーキングセンターをオープンしました。ここでは、自然のみちの利用者に地域の自然情報を提供する案内コーナーや展示ホール、環境学習のできる研修室、利用者の休憩や更衣スペース等の利便機能を備えています。

自然とのふれあいはソフトが大切

このように、身近な自然の地域において「歩く」ことにより自然とふれあえ、自然教育を推進する拠点となる施設の整備が進められてきました。しかし、本事業の目的は、こういったハード面の整備だけではありません。今後、施設を活用した自然観察・環境教育などのプログラムを組み、自然解説指導員やボランティアなどによる解説活動を行うなど、ソフト面を重視した施設の運営を図ることが大切になってきます。

そういった考え方のもと、今年４月20日のウォーキングセンター竣工式では、地元加古川市の歩け歩け協会主催による、オープン記念のウォークラリーを行いました。また、オープン前には、市民の方にふるさと自然のみち周辺の自然をテーマとした写真を募集し、作品を館内の展示ホールにて紹介しました。

ウォーキング・コースマップ
出典：パンフレット

ウォークラリーは、写真におさめるような風景として、身近な自然を見直してもらい、実際に歩くことでこれまで気づかなかった自然のすばらしさを体感してもらうことを意図して企画したものです。

私も加古川で生まれ育ったのですが、ルート選定のために現地をくまなく調査してまわると、これまで知らなかったことや気づかなかったことがたくさん発見できました。普段なにげなく接している環境は、実はとてもすばらしく貴重なものなのです。

理想のふるさとをめざして

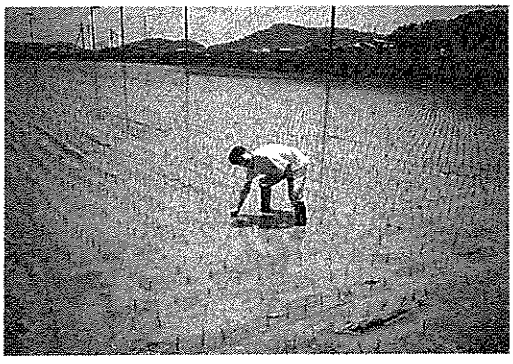
というわけで、本事業のめざす理想は、私も含め住民の方々が、自分たちの身近にある自然環境に興味・関心をもち、それを自分たちの手で保全し、失われたものは回復する、こんな活動が日常生活の中で当たり前のように行われている、ということなのです。

里山に行って芝刈りをしたり、山野草を摘む。田んぼへ行って農作業をしたり、七草を摘む。子供たちは山へ行って虫をとったり、川に入って魚をとる。休日には近くの原っぱでお父さんが子供に野鳥や虫、植物の名前を教えたり、一緒に草花遊びや草木染め、竹細工、木の枝を使った工作をする。近所で採れた農作物をもち寄り都会の人と一緒に食す。散歩をしながら農作業をするおじいさん、おばあさんに昔の話を聞く。家庭では道行く人のために庭に花を植えたり、窓台に花をおく。普段からみんなで集まって川やため池の掃除をするなどなど。ややノスタルジックな趣もありますが、本事業で整備した施設とその運営プログラムがきっかけとなって、地域全体に自然環境への興味・関心が広がっていき、日常生活そのものが、わがまちわがふるさとの環境をよりすばらしいものにつくりあげていくことにつながっていけばいいなと、企画の段階から施設の実施設計までトータルに関わった者として、また、地元加古川に住む市民として、ぼんやりとそのようなことを思う次第です。

（大阪事務所　いなおか　ひろし）

農作業体験日記　No.1

都市と農村の交流というほど大げさなものではありませんが、私の実家が加古川市の田舎にあり、農業をやっていることもあって、弊社の有志が何人か集まって（全員都会のマンション暮らし）、実家の田植えを手伝ってもらいました。5月にはほぼ同じメンバーで、種まき（苗床づくり）の手伝いもしてもらいました。自分で植えた種がすくすくと育って苗となり、それを田んぼに手で植えるというのは、なかなか楽しいことのようです。



生まれてはじめて水を張った田んぼに入った人も、最初足もとがおぼつかず泥棒のような足どりでしたが、最後には一人前の農家人に見えるほどになっていました。

次回は、田植えを手伝った人にも来てもらい、今秋の稲刈りで収穫する予定です。

（稲岡通信員）

京阪神北部丘陵に既存都市活用型の新首都を

ー関西の学者らが提言ー

重本　幸彦

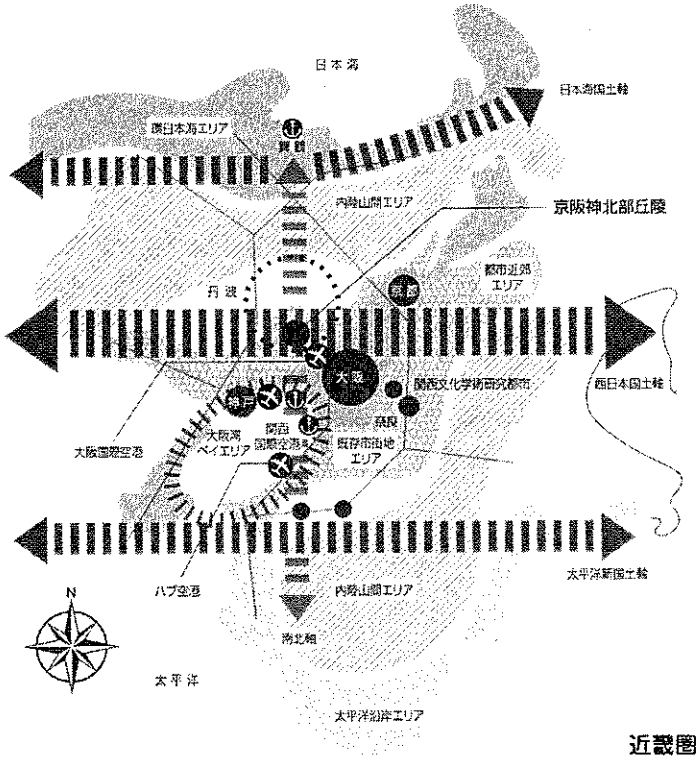
この6月に、京阪神大都市圏の北側、京都府・大阪府・兵庫県にまたがる丘陵（京阪神北部丘陵）地域を対象地に、首都機能の移転に関する提言が出された。

従来、首都機能の移転候補地は、東京から300kmまでで関西は対象外と伝えられていた。しかし、国土庁の基準をよく読めば、その背後に東京からの日帰り圏で「新幹線で2時間程度」までとされている。現在、東京～新大阪間は2時間30分で、今後の改善を見込めば、関西もほぼこの基準をクリアする。その他、対象地内の宝塚市北部では既に公的に開発用地が確保されているなど、京阪神北部丘陵は国土庁の選定条件を十分満たすというのが、主張の第一である。

提言をまとめたのは、大久保昌一大阪大学名誉教授を委員長とする学者グループ（北摂・丹波21世紀都市研究会。事務局はアルパック大阪事務所）。首都機能移転には全国で十数カ所が立候補しているが、多くは県などの行政主導で誘致活動が過熱中で学者グループが前面に出るケースは珍しい。かつて学者提言型で、関西文化学術研究都市の建設を成功させた関西らしいスタイルといえよう。

この提言が、他の候補地と異なるのは、まず、広く国土的・国民的な視点から、客観的・理論的に、関西の適地性と新首都のあるべき姿やこれからの都市像を述べている点だ。国の財政難により首都機能移転凍結が検討される中で、国民にじっくり考えようと呼びかけている。

次に、我が国が明治以来、「富国（強兵）・殖産興業」を掲げ近代化を追求して130年、これからは脱成長・脱欧米・脱中央などの



近畿圏の地域構造

「脱近代化への大転換」が必要で、国土の東京一極集中是正と併せて、首都機能移転というインパクトが必要だとしている。脱近代化のパラダイム転換を呼び起こすには、全国的に中央信奉などの従来型の価値観の打破が必要で、そのためには関西などへ首都機能を移転し、その成熟した文化的土壌を活用した価値観転換の推進が望ましいとしている。

さらに、既存大都市圏近くへの移転は、原野での新規開発などに比べ道路・鉄道・空港・商業機能などの既存都市ストックを活用でき、新首都の規模・費用・工期・環境負荷が削減され、その余裕財源を活用するなら質の高い首都ができるなど、「既存都市活用型」のメリットを協調。

理念として、「世界都市」「持続可能都市」「新文化首都」「国民参加都市」を掲げ、目標像としては「緑と文化　豊かな京阪神北部丘陵に　世界と価値を共有できる新首都を」を打ち出している。

具体戦略としては、（都市の）成長管理、複数の新都市地区のクラスター型・ネットワーク型配置、新首都運営の効率化、知恵と文化の情報発信、国際地域の形成、環境共生型でサステイナブルな自然一体の都市づくりなどを示している。

（「提言」をご希望の方は、郵送料 160円分の切手を添え、アルパック・大阪事務所　企画推進部へ。）

（大阪事務所　しげもと　さちひこ）

きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況　きんきょう　近況

建築家が音楽会を催す
ハートフル　フェスタ'97

三輪　泰司

6月7日、京都コンサート・ホールで、(社)日本建築家協会（ＪＩＡ）近畿支部の主催、ハートフル・フェスタ'97が開催されました。

建築・こころ・音楽

これは支部大会ですから近畿支部挙げての実行委員会で練ること1年。ホストの京都会は、1995年10月12日に開館した京都コンサート・ホールを会場に提案しました。

コンサート・ホールは、あくまでも音楽の殿堂。“建築”と音楽の接点を議論して、いろいろなことを学びました。ホールは“建築”ですが“楽器”でもあります。ホールの空間で音はどのように響きあうのでしょうか。テーマに沿ったエッセイ集もつくりました。

音楽の楽しさは、その基本であるアンサンブルにあります。金管によるファンファーレに始まり、パイプオルガンの響き。ソロ→デュオ→トリオ→カルテット→オーケストラへと拡がる音の饗宴。人間の声も音楽です。ソロからコーラスへ。フィナーレはオーケストラ、コーラスに、パイプオルガンも加わってヘンデルの「メサイア」からハレルヤ！。

市民に無料で開放しようと考えました。申込受付が殺到しました。盲導犬1頭も加わって1800の大ホールは満席。“こころ”が建築と音楽を結びつけました。

建築家の催しですから、ホワイエにはイーゼルを並べて、コンサート・ホールの出来るまでや建築家大賞受賞作品の写真や模型を展示。近く京都でも始める建築相談室のＰＲもしました。展示には予想以上に市民の関心が高く、用意した紹介パンフはあっという間に品切れになりました。

建築は愛好家に育てられる

ホワイエでのパーティは、総合司会のマリ・クリスティーヌさん、澤カルテットはじめ、専門音楽家と建築家達の大交流会兼反省会。マリさんとは京都国際デザイン祭以来です。

建築家にもアマチュア音楽家がいます。プロとアマが一緒になって、全くの手作りの企

画でした。高いレベルの音楽会を聴き慣れておられる方には、いささかご不満が残ったかと思いますが、こんな楽しい音楽会もあってよいのではないでしょうか。

ワークショップによる市民参加の建築づくりが進んでいます。“建築家の社会的責任”とは掛け声でなく実行段階にあります。

ＪＩＡ穂積会長は、小ホールでのトークショーを「楽器もホールも使い込んでいい音になじむように、建築も愛好家市民によって育てられる、それは品格ある方向へである」とまとめられました。かく申す私は、副会長をおおせつかっています。非力で申し訳ないのですが、京都コンサート・ホールはじめ、素晴らしい方々に応援して頂いて感謝の念でいっぱいです。裏方で働いた建築家達は、建築の設計は如何にあるべきかを学び、共に汗を流して、心からの友を得ました。彼らの多くは、バブル期も今も、巨大プロジェクトとは無縁です。労働基準法にも守られず、脚光を浴びているけれど市民に顔を向けていない人と違って、本当はとても苦しいのです。

市民と共に誠実に奉仕する、真に実力ある建築家を、皆さんに見出して頂けたことが喜びです。(社)日本建築家協会の未来に明るい希望を見つけました。

（取締役会長　みわ　ひろし）

「震災から復旧・復興へ」の発刊

石本　幸良

去る３月に兵庫県公営住宅等推進協議会から、今回の大震災による被災から災害復興公営住宅の建設に至るまでの経緯を記録した「震災から復旧・復興へ―阪神・淡路大震災から災害復興公営住宅への歩み」が発行されました。実際に復旧、復興事業に携わった職員により、記憶が新しい段階に復旧・復興の取組や多くの教訓・反省点を記録にし、後世に残すこと、また、全国に報告することが、全国から頂いた多大な支援に対する責務との考えにたち、編集・発行されました。兵庫県下の再生マスタープラン、住宅マスタープランの調査計画をお手伝いさせて頂いている関係から、その編集事務局の一員として私も参加しました。

今回の編集の内容は震災後の避難所生活から応急仮設住宅、公営住宅の災害復旧事業については取組の内容と現時点での総括、災害復興公営住宅の建設については「ひょうご住宅復興３ヵ年計画」の実施に向けた具体的な建設計画の最終調整段階で建設中であり、現時点での計画の内容を整理することとしました。

編集当初は詳細な個々のデータはありましたが、トータルに、時系列的にまとめた資料がない段階であり、関係者へのヒアリングを中心に、データ収集と確認も同時に行う方法で実施しました。ヒアリングの際には、関係者の震災後の混乱期の取組の生の状況に接し、メモにまとめることさえも関係者からお叱りを受けたこともありましたが、復興事業が継続中であり、担当者の思いをできるだけ忠実に、また、そのことに対する評価は真摯に受け止めることを確認しつつ、編集作業を進めました。その成果として、避難所から応急仮設住宅の建設、入居と管理の段階までについては実際にその取り組んだ関係者の各段階での判断、現時点での関係者としての総括まで踏み込むことができました。復興計画については編集作業中にも新たな取組が絶えず追加される状況であり、現時点での取組をできる限り網羅するこに努めました。今後は、災害

復興公営住宅が完成し、入居が一定完了した時点で、再度、復興住宅についても報告と総括をまとめることとなっています。

今回の編集作業をお手伝いし、これまで伝聞であった震災以後の各種取組について現場担当者から直接に情報を入手する機会に恵まれ、多くの勉強をさせて頂きました。編集委員の皆さんとヒアリングをさせて頂いた関係者の方々に心から感謝するとともに、現在進められている復興住宅の建設により、被災者の方々が安心して暮らせる住宅に一刻も早く入居されることを願っております。

（京都事務所　いしもと　ゆきよし）

「NPOフォーラム'97」ー市民社会の創造とNPOの役割ーに参加して

尾澤　律子

市民活動やＮＰＯ活動において、思いはあっても財源が伴わない、活動が長続きしないなどのお話を聞きます。ロマンとは別に第３セクターとしてのＮＰＯとしての組織、マネージメントの探究はＮＰＯが社会的に重要なポジションを担う立場になるにつれ、重要になると思われます。

折しも、昨年11月に設立された日本ＮＰＯセンター主催の「ＮＰＯフォーラム'97」が６月14・15日に神奈川で、その翌週に大阪で開催され、分科会を神奈川で、基調講演を大阪で聞きに行きました。参加者数は神奈川のフォーラムが約 500名、大阪は約40名でこの数字はいろいろな見方ができそうです。

「愛情の反対は憎悪ではなく、無関心だ」というマザーテレサの言葉の引用で始まったフォーラムはジョージタウン大学公共政策大学院教授のバージニア・ホジキンソン氏の講演でアメリカ社会におけるＮＰＯの意義、インフラ・オーガニゼーションの現状と役割、氏が顧問をされているインディペンデントセクターの組織、事業活動について話されました。もちろん、税制度を含めて歴史的・社会的背景、国民意識などあらゆる面でアメリカとは異なりますが、意識的素地があるとは言ってもアドボカシー（政策提言）やキャンペーン等、外向きのアピール体制や資料・データの整備が印象的でした。

分科会では「ＮＰＯの事業経営。その可能性と限界とは」に参加しました。ワーカーズコープ、ウイン女性企画、ワーカーズコレクティブの方をパネラーに迎え、「食えるＮＰＯを！」という参加者（特に女性）の勢いは強く、その奮い立つパワーを後押しするような基盤整備が望まれます。ロマンを餓死させないためには多くの課題と可能性があるようです。ホジキンソン氏の言葉通り「ＷＯＲＫ ＭＯＲＥ」の時なのでしょう。ＮＰＯ活動について、メッセージがあればお聞かせ下さい。

（京都事務所　おざわ　りつこ）

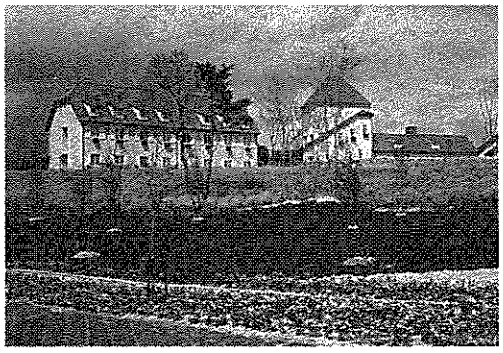
「農」のﾃｰﾏﾊﾟｰｸ“ブルーメの丘”

森川　宏剛

この４月にオープンし、大変な人気が出ている施設で、滋賀県日野町の『ブルーメの丘』に行って来ました。

ＣＭ、広告などでもかなり大々的に宣伝されているので、ほとんどの方がご存じのことと思います。

『ブルーメの丘』は、ドイツのバイエルン地方の農村をイメージして作られた『農』のテーマパークです。主要なテーマとして、地域農業の活性化、国際交流、家族のふれあいの場の提供、農業体験学習、地元雇用を掲げ


一面に拡がる菜の花畑

家族連れなどの客で賑わう「ブルーメの丘」

ています。県の農業公園で、運営主体は、㈱日野ファームという第３セクター（日野町、ＪＡグリーン近江、㈱ファームの出資による）です。㈱ファームは近年全国的にファームパークの施設展開を手掛けている会社です。

『ブルーメの丘』の総事業費は52億円で、ウルグアイ・ラウンド関連対策の農業構造改善事業費などを取り入れています。

施設は、35haの丘陵地に、食堂や輸入雑貨店、農産物加工販売施設などが立地する街、畑、牧場、遊具施設などがあり、すべてドイツ風のイメージで統一されています。楽しさを演出するため、遊具施設も充実しています。牧場では、ポニーの乗馬や羊に餌をやるなど動物とふれあう場もあります。また、芝生などのスペースが広く取ってあり、子ども連れで遊ぶには手頃だと言えます。

私はオープン直後の４月下旬に訪れたのですが、まず 3,000台分の広大な駐車場と、丘陵地一面に拡がる菜の花畑が圧巻でした。平日でしたが家族連れなどの客がかなり来られていました。

加工体験販売施設はかなり力を入れているようでバター、アイスクリームなどの乳製品やソーセージやハムなどの肉加工製品、地ビールなどかなりの規模と言えると思います。

カフェテリアレストランもありますが、食べるならむしろドイツの民俗芸能を鑑賞しながら地場のスペアリブと地ビールを食すというのがおすすめです。

駐車場は充分に整備されていますが、名神高速道路八日市ＩＣから意外と遠く、また、公共交通機関でのアクセスが不便というのが難点でしょうか。

今後は、客を飽きさせず、リピート率を上げる事業展開をできるかどうかと、農業の担い手と都市生活者の一過性に終わらない交流を促進し、販路拡大だけでなく、地域農業の活性化につなげていけるかがキーポイントとなるのではないでしょうか。

（京都事務所　もりかわ　ひろよし）

呼吸するお寺“應典院（おうてんいん）”

森岡　武

「体験としての建築」は、決して新しいテーマではない。「呼吸する生きられた空間」は均質化され場所性・身体性を失った近代建築の批判のテーマとして20世紀後半の重要な課題の一部を占めてきた。

21世紀に向け呼吸困難に陥った都市空間に新しい息吹を吹き込むことを目論んだ「呼吸するお寺」が大阪の天王寺、国立文楽劇場の近くにオープンした。

大阪寺町の活性化と現代人の「心の癒やし」を担った浄土宗大蓮寺の塔頭寺院、應典院（おうてんいん）は「気づき」「学び」「遊び」をキーワードに

外観

本堂内での写真展

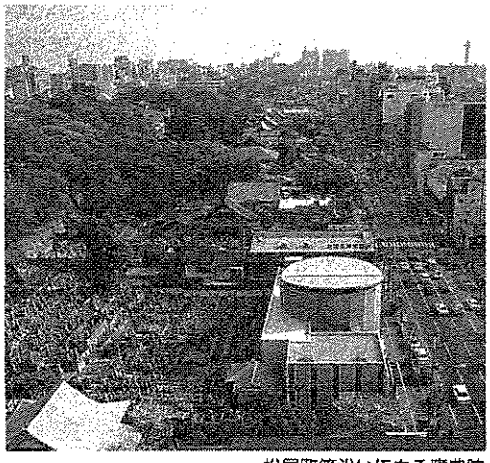
檀家制を廃止し、会員制により運営する市民参加型の都市寺院である。

「葬式仏教といわれる現代において、もっと若い人に寺の使い方をうまくなって欲しい。」と高口恭行・造家建築研究所の河裾伸一氏は話す。

彼によると、應典院の設計コンセプトは、“闇と光明”である。極楽とは、光あふれる光明の世界であり、俗世は先の見えない闇夜だということだ。

松屋町筋を目的ももたずに歩く歩行者を誘導するため、エントランスにあたる交流広場はガラスブロックとミラーガラスにより俗世にむけて光を放っている。

その奥の階段を上がると従来縁側であるべき「気づきの広場」が広がる。その眼前には、生國魂(いくたま)の森の豊かな緑と幾百もの墓石群が立ち並びやはりこの場所は寺であると実感させられる。また仏さんに気遣い、仏さん（墓から）の視線はミラーガラスで仕切られている。


松屋町筋沿いにある應典院
出典：パンフレット

黒彩を放つ円柱形の本堂はシンボル性と本堂としてのボリュームから決められた。その内部空間は、十念（南無阿弥陀仏を十回唱える）という概念から、南無阿弥陀仏を表す六角形の金色の柱が10本並び、その１本の柱に御本尊が祀られ、背後に切られたスリット窓から後光がさす。またこの本堂は、音響や照明を装備した劇場空間となり、最大 140人収容可能という。夏から秋にかけてはコンサートや演劇が計画されている。

それぞれの空間が緩やかに繋がり、ガラスブロックの使用により視覚的な広がりをもたせている。寺という厳格なイメージが薄れ、カジュアルな雰囲気を醸し出している。

大阪人の「心の癒やし」の原点は「お笑い」特に「ぼけ」と「つっこみ」にあると私は考える。このお寺は、二人の住職（應典院住職・秋田光彦氏と建築家である一心寺住職・高口恭行氏）の、＜仏教＞及び＜地域＞に対する「ぼけ」であるのではないか？この「ぼけ」に対する「つっこみ」は、この場所に集う人々に委ねられたのである。その「つっこみ」に仏さんが大声で笑い、自らも腹の底から笑える、そんなお寺に展開していくことを期待したい。

（大阪事務所　もりおか　たけし）

巨大商業施設の出現でますます活気づく新宿～タカシマヤタイムズスクエア その後

阪井 暖子

昨年10月４日、新宿に華々しくオープンしたタカシマヤタイムズスクエアの近況報告を。

かつて決してメジャーとはいえなかったＪＲ新宿駅南口の旧国鉄貨物置場跡地開発の口火をきった巨艦複合施設タイムズスクエアの人気は依然衰えをみせていません。新宿駅南口及び新南口の人の流れは、週末などは混雑度 150％の電車のようです。また、以前からあった伊勢丹、三越等への回遊客もかなり多く、新宿タウンエリアの実質的拡大が定着したようです。

さて、このタイムズスクエアは都市型マルチエンターテイメントＳ．Ｃ．と称して高島屋百貨店、ＤＩＹショップの東急ハンズ、紀伊國屋書店で構成されています。さらに集客施設として28のレストランが集まるレストランパーク、アミューズメント施設の新宿ジョイポリス、３Ｄシアター東京アイマックスシアター、巨大ＣＤショップＨＭＶそしてエステティック、ヘアーカットができるビューティサロン“ル グラン ソシエ”が付随しています。

レストランパークのある12、13階にはオープンテラスがあります。今回はこのオープンテラスの魅力を中心にご報告をいたします。

オープンテラスは、レストランを囲むように設けられており、縁辺は屋上庭園となっています。床材にボードを用いたり、テーブルや椅子もおしゃれなものを使っており、なかなか洒落た雰囲気になっています。

こういった百貨店の屋上というのはビアガーデンや子供のためのミニ遊園地になりがちですが、タイムズスクエアのテラスは一部分オープンカフェとして使われていて、大半は誰でも無料で自由に利用できるようになっています。写真は土曜日のお昼の様子ですが、持ち込みのお弁当を食べたり、本を読んだり、おしゃべりしたり、はたまたトドのように昼寝したりとそれぞれが思い思いにこの空間を楽しんでいるようです。オープンカフェのスタイルは、表参道やお台場海浜公園のサンセットレストラン“ロー”などかなり多くなってきていますが、このような空間は、レストラン側からとテラス側からとの見る見られるの関係が軽い緊張感とのぞき見趣味的な要素を含んで、一種の心地よさにつながっているように思います。ついでにこのテラスには小さな祠まであるので、お参りまでできたりします（外人さんはこれをなんとみるのでしょう）。

さて、このオープンテラスの一番の売りは、西新宿の高層ビル街、新宿御苑等の眺望です。タイムズスクエアの命名はこれからではと思

ボードをあしらったテラス

２層吹き抜けテラス

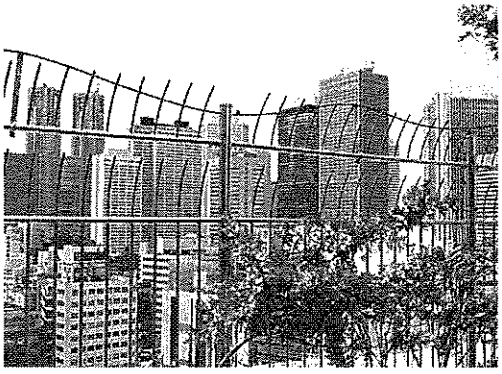
わせる摩天楼は特に夜景が最高です。映画のワンシーンのようなロマンティックな風景に夜はカップルでいっぱいです。

このロマンティックな空間に、さながら観光地の「見晴らし台」のような「お立ち台」が新たに出現しました。これは、この風景をもっと良く見ようと屋上庭園の緑の中に踏み込む人々が多いため、たまりかねて置かれたようです。（まあ、夜は暗くなって目立たないからいいか・・・・・。）

蛇足ですが、実はこのオープンテラスからは我が東京事務所が入居している霞ビルもみえるのです。

これからのシーズン、より魅力的な場所になってきます。東京へお越しの際はこの夜景を見に行かれるとともに、事務所に顔を出していただくことをおすすめします。

（東京事務所　さかい　あつこ）



新宿摩天楼の眺め

「見晴らし台」のような「お立ち台」

㈱九州地域計画研究所（九州事務所）の新体制について

私どもは、1974年に㈱地域計画建築研究所（アルパック、本社・京都）の支店として活動をはじめ、1982年には自立を目指して支店から別法人となりました。その間には事務所の存立の危機もありましたが、皆様方のご支援、アルパックの各事務所のご協力を得て、一応の自立した活動ができるようになり、全所員が主体性をもって活動する“地域づくりの屋台村”を目指して取り組んでいます。その中で私は1984年以降、代表取締役として地域の皆様方からいろいろな面でのご指導をいただいて参りましたが、一応の節がついたとみられる時に、若返って新たな一歩へと、事務所の経営も進めていきたいと考えています。当面２人代表としますが、いずれ山田、山辺が名実ともに全責任を持ち、取り組んでいく所存でございます。今後ともより一層のご厚誼とご支援の程お願い申しあげます。

代表取締役　糸乗　貞喜

この度、５月の株主総会で役員の改選がなされ、新たな体制となりました。これを受けて所員一同、今までお世話になった方々のネットワークを大切にし、各自それぞれが力をつけて、本当の意味での“地域づくりの屋台村”を目指していきたいと思っています。

屋台村は一人ひとりがそれぞれの個性に合った店を出し、全体でひとつの村をつくり、力を発揮するものです。地域の知的インフラとなる屋台村として、皆様の期待に応えられるよう努める所存でございます。今後ともご支援とご鞭撻の程よろしくお願い申しあげます。

代表取締役社長　山田　龍雄
専務取締役　山辺　真一

新刊旧刊書評紹介

多田　富雄　著

『免疫の意味論』青土社 発行／『生命の意味論』新潮社 発行

紹介　伊藤　克恵

発行は異なりますが、『免疫の意味論』の視点を広げたものが『生命の意味論』なので、2冊一緒に紹介することにしました。最初に本のタイトルを見た時には「意味論」、難しそうだなと思いましたが、私は大学時代に免疫システムに興味を持っていたこともあり、読み始めました。「キラーT細胞」とか「免疫グロブリン」などの専門用語も多数出てきますが、章ごとにわかりやすい注釈が付いていて、視点が面白かったので、読み入ってしまいました。前著の『免疫の意味論』は反響を呼び、第20回大佛次郎賞を受賞しています。

『免疫の意味論』では、免疫という「超（スーパー）システム」を通して、生物学的にみた「自己」とは何かを考えさせるものになっています。

免疫は、病原性の微生物のみならず、あらゆる「自己でないもの」から「自己」を区別し、固体のアイデンティティを決定するものです。しかし、この免疫的「自己」「非自己」をみていくと、明快な答えが出てこないことがあります。免疫系は人間に寄生しているウイルスを自己として扱う一方で、自分の遺伝子を「非自己」と認識し、免疫反応を起こすことがあるのです。では、「自己」とは何なのか。

一方、『生命の意味論』では、生命現象という「超（スーパー）システム」の解明がいま人間に向かって何を語りかけているかを考えさせるものとなっています。

例えば、死の意味について。人間の体内では、毎日3千億個以上の細胞が死に、同数の細胞が新生されて平衡を保っています。細胞が死なずに新生だけが起こったらパンクします。細胞には死がプログラムされており、生命はもともと死するものとして誕生してきたものなのです。また、老化についても、老化に伴い様々な原因で修正不可能な欠陥が生じ、「超（スーパー）システム」の予備能力を超えたときにおきるシステムの崩壊であるとしています。

さらに、都市にもこの「超（スーパー）システム」をあてはめて見ています。「超（スーパー）システム」として都市を見た時、都市は歴史の「記憶」を持っています。この「記憶」によって都市はアイデンティティを保ち、都市は最終的には「自己」を持つようになります。『「超（スーパー）システム」としての都市観は、いくつかの点で今後の都市計画の上で考慮に価するのではないかと思われる。（中略）近年の都市開発で創られた団地の集合住宅街が、都市という生命体に寄生し増殖し続ける癌のように見えることがある。』と著者は述べています。

この本を読んで、「自己」とは何か、さらには「超（スーパー）システム」の見方で他のものを見たらどうなるのかと考えてみるのもいいのではないでしょうか。

（名古屋事務所　いとう　かつえ）

まちかど

過去と未来をうつす鏡

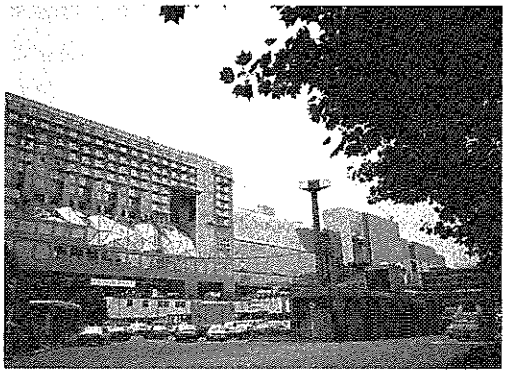
鵜飼　奈弓

御存知の方も多いとは思うが、京都駅ビルの外装工事がほぼ終わろうとしている。景観論争のなかでは、ヴォリュームとして議論されがちであったが、こうして現実に立ち上がってみると、素材や色、仕上げのディテールが見えてくるので、新たな目でこの建物を見ている人も多いのではないだろうか。

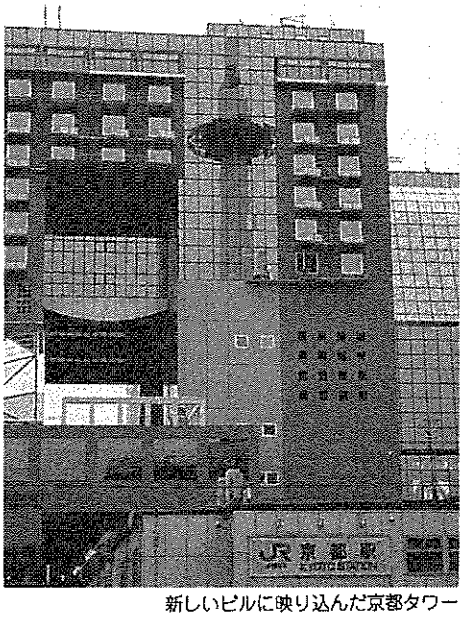
我々のように景観をなりわいにする者にとって、動線に伴うシークエンス（移動しながらの景観）、動線のノード（結節点）からのアイストップ（焦点）というのは常に意識しなければならないものである。住民にとってはいうまでもなく、京都駅は烏丸通りの突き当たりとして意識の上でアイストップになっているが、烏丸通りが湾曲していることや建物幅が大きいことから実際には遠くからの焦点にはなりにくい。

ところが、駅前の交差点に立つと面白いシーンが見られるのだ。駅に向かう車の座席の位置が丁度良いのだが、駅ビル正面のハーフミラー部分に『ろうそく』（京都タワー）が、まるで額縁に収まるように（意図的かどうかは知らないが）映りこんでいる。一般に大規模建物の外壁にハーフミラーを使うのは、周辺の景観や空を映して景観の同化を図るため、という場合が多い。そう考えると、30余年前に景観論争を呼び起こしたタワーを、現代の景観論争の的が映しているというのは示唆的である。

（京都事務所　うかい　なゆみ）



駅ビル正面全体像



新しいビルに映り込んだ京都タワー

アルパック (株)地域計画建築研究所

•本　　社
•京都事務所 〒600京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82・大和銀行京都ビル6F／TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
•大阪事務所 〒540大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F／TEL(06)942-5732 FAX(06)941-7478
•名古屋事務所 〒460名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F／TEL(052)265-2401 FAX(052)249-3925
•東京事務所 〒160東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401／TEL(03)3226-9130 FAX(03)3226-9560
•九州事務所 (株)九州地域計画研究所 〒810福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハピエ5F／TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673